平成 30 年度 8020 公募研究報告書抄録（採択番号：18-3-07）

研究課題名：多職種連携医療（NST）における栄養と口腔機能の関連と歯科介入効果の検討

研究者名：鈴木啓之[1]，松原ちあき[1]，中山玲奈[2]，古屋純一[2]，水口俊介[1]
所属：1．東京医科歯科大学　大学院医歯学総合研究科　高齢者歯科学分野
2．東京医科歯科大学　大学院医歯学総合研究科　地域・福祉口腔機能管理学分野

【緒言】

近年，NST などの多職種連携チームへの歯科の積極的な参加が期待されている．しかしながら，NST の対象となる入院高齢者の口腔環境・機能の実態はいまだ明らかにはなっていない．そこで我々は， NST 対象入院高齢者の口腔環境・機能を明らかにすることを目的として，横断調査を行った．なお，本研究は東京医科歯科大学歯学部倫理審査委員会の承認を受けて行った（承認番号 D2016-077）．

【方法】

東京医科歯科大学医学部附属病院入院患者のうち，栄養管理目的で NST 依頼となった患者を対象とし，全身状態や口腔環境および機能に関するデータを診療録より後ろ向きに調査した．本研究のアウトカムは，身長，体重，BMI，意識レベル（JCS），Performance status（PS），現在歯数，機能歯数，咬合支持状況（Eichner 分類），口腔環境の包括的評価（OHAT），嚥下障害の臨床的重症度分類（DSS），栄養摂取方法（FOIS）とした．

【結果】

本研究参加者は，2016 年 4 月から 2018 年 12 月までに，栄養管理目的で NST 依頼となった 288 名のうち、歯科医師による口腔内評価を受け，データに不備がない 231 名（男性：133 名，女性：98 名，平均年齢：67.4±16.4 歳）とした．多くの研究参加者は意識レベルが比較的良好ではあるものの，日常生活には制限があり，日中の 50%以上をベッドもしくは椅子で過ごす患者が多く認められた．本研究参加者の現在歯数は 17.5±10.7 本，機能歯数は 19.7±10.3 本と，本研究参加者は比較的多くの残存歯を有していたが，約 50%が舌，口腔乾燥，義歯，口腔清掃の問題を有していた．また，DSS スコアの平均値は 3.9±2.1 であり，依頼時の FOIS スコアと歯科医師により推奨された FOIS スコアはそれぞれ 3.3±2.5, 3.8±2.4 であり，本研究参加者の多くは，何らかの摂食嚥下機能障害を有し，摂食嚥下機能と食形態との間に乖離が認められた．

【考察】

本研究により，東京医科歯科大学医学部付属病院 NST 依頼患者においては，比較的多くの残存歯および機能歯数を有しているものの，舌，口腔乾燥，義歯，口腔清掃の問題を有するものは半数以上を占めることが明らかとなった．また，NST 依頼患者の半数以上が，何らかの形で経口摂取をしているものの，摂食嚥下機能障害を有するものが多くいることも明らかとなった．さらに，NST 依頼時の FOIS と歯科医師が推奨する FOIS との間に有意な差が認められた．これらのことから急性期病院における NST に対して，歯科医師が積極的に参画し，歯科治療，口腔機能管理・リハビリテーション，さらには多職種に対して口腔ケア手法などを含めた指導・助言を行うことの重要性が示唆された．